

1 自己評価

<p>I 評価結果（別紙参照）</p> <p>II 分析・改善方策</p> <p>(1) リーダー育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高い志をもち、各種コンテストや検定、行事等に積極的にチャレンジし、成果を挙げることができた。 ・難関大学志望者だけでなく、その他の生徒に対しても目標設定の在り方を工夫し、自分の目標に向かって学び充実した学校生活を送ることができるようにする。 <p>(2) 学力向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果が、生徒・保護者の数値に対して、教員の数値が低めに出ている。総合的な学習・探究の時間については、日々の授業との連関の強化、Chromebookの活用については、先進的な取組を紹介するなど、教員が学力向上を実感できるようにする。 ・評価Aの目標値が高いので、90%程度の目標値とする（低いときに原因分析ができて、それが活かせるようにする。）。 <p>(3) 敬愛される人間関係づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あいさつ」に関する項目の数値が、他の項目の数値より低い。あいさつについては、まずは教員が率先して行うとともに、生徒と教職員との信頼関係、生徒同士の良好な人間関係が構築できる取組を、生徒会や各種委員会と協力して増やす。 <p>(4) 適切な支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内における情報共有のシステムはできている。今後も、配慮が必要な生徒に対して、外部機関との連携を図りながら、校内で組織的に対応していく。 <p>(5) 効率的な学校運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自動採点システムやICT機器の積極的活用により、負担軽減に繋がった。 ・考査や行事が集中する6月、10月の業務負担軽減が今後の課題である。各係の業務負担の軽重を年間を通じて把握し、課を越えて相互に協力することで業務の平準化をはかる等の工夫をする。
--

2 学校関係者評価委員名（五十音順）

小田 あやき（学校評議員）	重松 恵子（学校評議員）	高旗 浩志（学校評議員）
谷本 祐一郎（学校評議員）	福岡 隆（学校評議員）	

3 学校関係者評価

<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は学校評価書の構成を抜本的に見直し、次年度以降の改善に繋がる大きな一歩を踏み出しており、その姿勢は高く評価できる。 ・学校評価書の核は「整合性」である。項目間の整合性を意識し、さらなる改善を図り、評価の実質化を図ってほしい。 ・学校評価書の評価項目の大幅な削減を図る際、「当年度の重点目標」を絞り込むことが必要であり、学校として改善を図りたいことや新しく始めた取組といった「挑戦」を重点目標として絞り込み、その成否について学校評価委員会を開くことで、より実質的な議論を展開してほしい。 ・大安寺の強みの一つに「6年間を通した探究」がある。探究とは、「どう生きるか」「どう社会と関わるか」を自身の半径5メートルを起点に考えることと捉えると、進路キャリアにつながることは必然である。今後、探究×進路キャリアの連携を期待している。 ・重点目標の中でも、単年度で達成可能な課題と長期で達成する課題を分けることが重要と考える。長期的な課題の計画と、次年度に向けて行う項目にもっと連動性を持たせても良いように思える。
--

4 来年度の重点取組

<ul style="list-style-type: none"> ・期に応じた「チーム作り」（リーダー、フォロワー等の役割を意識した集団作り） ・高い志をもつ集団作り（難関大学・学部・学科を志望する生徒数が学年の50%以上） ・主体性の育成（生徒主導の計画・運営を支援） ・効率的な情報共有とペーパーレスの推進（配付物のデジタル化） ・業務の精選と業務負担の平準化（課・室を越えた連携）
--

令和5年度 岡山県立岡山大安寺中等教育学校 学校評価書 (別紙) 最終評価

学校経営重点目標	担当部署	具体的方策	評価指標・評価基準	自己評価(中間)		自己評価(最終)		次年度に向けて
				達成状況	評価	達成状況	評価	
1 高い目標を掲げ、チャレンジし、世界のリーダーとして活躍する人材育成に学校全体で取り組む。	進路指導課	・学部研究・学問研究、進路講演会、オープンキャンパスへの参加などを通して、生徒の視野を広げるとともに、進路意識の高揚を図り、高い進路目標を持たせる。また、その進路目標の実現に向けて、主体的に学習に取り組む生徒を育成する。	・進路アンケートの項目「主体的な学習ができていないか」の肯定的な結果から評価する。 A 85%以上 B 昨年度の結果(82%)以上 C Bに満たない	・進路アンケート(10月実施)の結果は83%で昨年とほぼ同じである。1年生が高く、4年生に向けて低下し、5・6年生でまた高くなるという傾向も例年とほぼ同じであった。 ・後期課程になり進路目標が定まると、主体的に学習できるようになるのではないかと分析する。	B	・進路アンケートの結果は中間評価時のもの(83%)。 ・9期生の国公立大学前期試験出願予定者は、難関10大学が53名、医学部医学科が19名であり、高い進路意識と志望をもち、最後まで主体的に学習を続けてきた結果となっていると思われる。	B	・進路アンケートの「主体的に学習ができていないか」という問いは「主体的な学習」の定義づけが曖昧で、生徒も答えにくいのではないと思われる。アンケートの実施も含めて検討が必要だが、その際には評価の指標を再検討する。
	理科	・参加する意義や意味・メリットなどを説きながら、生徒に周知し、タイムリーに知らせることで参加を促す。特にサイエンスチャレンジ、物理・化学・生物オリンピックについては、対策講座を実施し、参加しやすい雰囲気醸成を図る。	・実際に参加した生徒の延べ人数、またオリンピックにおいて上位5%入賞者の数で評価する。 A 延べ人数が80人以上、または、上位5%入賞者が5名以上 B 延べ人数が60人以上、または、上位5%入賞者が5名未満 C Bに満たない	・9月末時点で、エントリー数は、サイエンスチャレンジ…16名、サイエンスチャレンジジュニア…6名、生物オリンピック…17名、物理チャレンジ…2名、物理コンテスト…12名の計53名 ・上位5%入賞者数は、生物オリンピック…1名、物理コンテスト…4名の計5名となっている。特に、生物オリンピックでは、3000名以上参加の中で上位10名に入った。	A	・数値は中間評価から変化なし。(延べ人数が53名、上位5%入賞者数が5名) ・サイエンスチャレンジでは、1チームが競技①で1位をとったものの、総合成績は5位であった。	A	・各コンテストにおいて、重複参加者も多いため、延べ人数に対して実人数はそう多くない。まず、声かけに力を入れ参加者の裾野を広げたい。 ・サイエンスチャレンジでは、過去問対策や、競技における助言等もコンスタントに行い、競技能力を向上させ、総合優勝を目指す。
	英語科	・多様な情報を読み取り、内容をまとめて相手に伝える力や、自分の考えを話したり書いたりする力を身に付けさせることを目標に、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能・5領域を伸ばすための授業を展開し、スピーチやディスカッションやディベートへと活動を広げていく。	・英検準1級について、「今年度の取得者数(のべ人数、第2回集計まで)」で評価する。 A 30名以上 B 20名以上 C Bに満たない	・10月6日時点(今年度の第1回の結果まで含む)での、英検準1級の取得者数は、6年生…21人、5年生…8人、4年生…1人、3年生…2人の計32名である。引き続き、英語科全体で協力して、指導を継続していく。	A	・12月15日時点(今年度の第3回の結果まで含む)での、英検準1級の取得者数は、6年生…21人、5年生…12人、4年生…4人、3年生…3人、2年生…1人の計41名であった。引き続き、英語科全体で協力して、指導を継続していきたい。	A	・これまでと同様に英検を始めとした各種検定を積極的に受験するように促すと同時に対策講座などを行い、英語運用能力を高める指導を継続していきたい。
	グローバル教育推進室	・「羽ばたけ大安寺Day」での異学年交流を通して主体的な学びを共有することで、生徒相互を敬愛する関係を築く。 ・留学を経験した生徒の体験を聞くことでその他の生徒に還元できる機会を持つ。	・行事に関するアンケートを実施し、肯定的な結果から評価する。 A 90%以上 B 80%以上 C Bに満たない	・参加生徒へのアンケートの結果、肯定的回答は各学年で90%を超え、全体95.2%であった。「異学年の(同学年の)発表から学ぶことができた」と、今年実施した「特別講演で英語学習への意欲が高まった」が高評価で「羽ばたけ大安寺Dayに満足している」が全体99.5%であった。	A	・留学体験報告会を開催し、参加生徒へのアンケートの結果、「報告は興味深かった」に肯定的回答が98.5%、「今後の学習や海外研修に役立てることができる」と「いろいろな学ぶことがあった」とともに98.6%と評価が高かった。	A	・海外研修再開を受け、本年の実績を踏まえて各学年に応じた事前学習の計画に取り組む。「羽ばたけ大安寺Day」で海外研修に関する発表を重点に行い、異学年交流を通して、知識と体験の継承を図る。また、オンラインを含む異文化交流の機会を増やす。
2 課題解決をするための思考力・判断力・表現力や主体的に学びに向かう態度を育成し学力の向上を図る。	学習指導委員会	・「生徒に付けたい力」を明確にした授業計画を立て、授業を展開する。 ・指導と評価の一体化を意識し、適切な評価を行い、指導に生かす。	・学校評価アンケートの「授業の指導」に関する項目(〔生徒〕項目1、〔教員〕項目1)の肯定的な結果から評価する。 〔生徒〕〔教員〕共通で A 95%以上 B 90%以上 C Bに満たない	・アンケート結果より、 〔生徒〕197.8%(62.2%+35.6%)→評価A 〔教員〕192.3%(55.4%+36.9%)→評価Bであった。 ・生徒・教員とも9割を超える高い結果となった。生徒については、昨年度の91%からさらに上昇している。また、「全く当てはまらない」と回答した生徒が昨年の4%から0.6%に減少した。授業互見等を通してさらに授業力の向上を目指したい。	B	・アンケート結果より、 〔生徒〕97%(58%+39%)→評価A 〔教員〕90%(62%+28%)→評価B ・中間報告同様に生徒・教員とも9割を超える高い結果となった。教員で「当てはまる」の回答率が7%上昇した。また、生徒で「当てはまらない」との回答が0%となり、教員の結果とも相関が見られた。	B	・教員の指導力向上のために、互見授業の方法の工夫や他校の研究授業への参加の働きかけを行った。互見授業への参加人数が増え、授業内容についての意見交換が行われたとともに、他者の授業を参観することで刺激を受けることも授業の工夫・改善につながった。来年度は、授業内容の工夫・改善の効果を検証しつつ、その結果をさらなる工夫・改善につなげることでできる体制を整えたい。
	総合研究開発室	・学習内容の充実を図るために、前期課程の学習の単元で身に付けたい力を明確にして実施する。 ・生徒の進路意識や他教科との関連を考え、学習計画を立てて実施する。	・学校評価アンケートの「学習の指導」に関する項目(〔生徒〕項目3、〔保護者〕項目3、〔教員〕項目13)の肯定的な結果から評価する。 〔生徒〕〔保護者〕〔教員〕共通で A 80%以上 B 60%以上 C Bに満たない	・アンケート結果より、 〔生徒〕95%(63%+32%)→評価A 〔保護者〕187.2%(47.3%+39.9%)→評価A 〔教員〕163.1%(23.1%+40%)→評価B ・総学・総探の授業において生徒が達成感を持っており、保護者にもそのことが伝わっているため高い結果になっていると考えられる。一方教員では、探究的な学びを深める授業改善にあまり取り組めていないという回答が約3分の1を占めていることから、総学を中心として探究的な学びを推進する働きかけが必要であると考えている。	B	・アンケート(12月)結果より、 〔生徒〕96%(59%+37%)→評価A 〔保護者〕90%(50%+40%)→評価A 〔教員〕60%(18%+42%)→評価B ・中間報告同様に生徒、保護者の肯定回答が多い。しかし、教員の肯定回答は6割であり、日々の授業と総学・総探の連関を図ることが今後の課題である。	B	・これまでは、各学年における学習内容や学習スケジュール、探究のやり方や校内ルールなど枠組みを研究してきたが、現在のやり方が定着してきている手ごたえを感じる。そこで、来年度は大安寺方式の探究活動について、担当から情報発信し、内容の充実を図るとともに、教科の学習との連関を図りたい。
	学習指導委員会	・Chromebookを活用し、協同的な学び、個別最適な学びを意識したSTAGE3以上の授業を行う。	・学校評価アンケートの「ICT機器の利用」に関する項目(〔生徒〕項目2、〔教員〕項目12)の肯定的な結果から評価する。 〔生徒〕〔教員〕共通で A 85%以上 B 75%以上 C Bに満たない	・アンケート結果より、 〔生徒〕187.3%(54.1%+33.2%)→評価A 〔教員〕164.6%(24.6%+40.0%)→評価C ・生徒の結果は、昨年度から6%上昇している。教員の回答については、昨年度より質の高い結果になっているため、低い結果となっている。指標の参考にしたものと同項目の結果は、90.7%となっており、ICT機器を有効に活用できていると考えられる。STAGE3や個別最適化、PBLの授業を目指し、互見授業の活用や情報共有を行っていきたい。	B	・アンケート結果より、 〔生徒〕85%(44%+41%)→評価A 〔教員〕67%(22%+45%)→評価C ・中間報告とはほぼ同じ状況となった。教員の数値が伸び悩む原因としては、教科の特性や指導内容に対するChromebookの有効性が感じられず、使用していない点が挙げられる。また、Chromebookは使用しているが、個別最適(生徒が自分のペースで進められる)な状況が設定されていないことも原因と考えられる。	B	・互見授業を通して、Chromebookの使用を呼びかけたり、Chromebookを積極的に活用し、個別最適な学びを意識した授業を本校教員に公開してもらった。 ・来年度から、1年~6年まで生徒全員がChromebookを持つことになるので、各教科でChromebookを活用した授業展開を研究するようにしたい。また、先遣校の取組事例も紹介し、取組を促進させたい。
3 生徒に自律を促し、自分の生き方を考えさせるとともに、敬愛される人間関係づくりを学校全体で取り組む。(成長を促す積極的な生徒指導に取り組む)	生徒課	・自然にあいさつを交わすことのできる人間関係づくりに努める。	・学校評価アンケートの「あいさつ」に関する項目(〔生徒〕項目12、〔保護者〕項目9、〔教員〕項目10)の肯定的な結果から評価する。 〔生徒〕〔保護者〕〔教員〕共通で A 90%以上 B 80%以上 C Bに満たない	・アンケート結果より、 〔生徒〕191.0%(54.4%+33.6%)→評価A 〔保護者〕182.1%(41.3%+40.8%)→評価B 〔教員〕183.0%(21.5%+61.5%)→評価B ・生徒のあいさつする意識は高いが、あいさつを返さない教員がいるとの記述もあり、気持ちの良いあいさつを教員から行うようにする。	B	・アンケート結果より、 〔生徒〕86.8%(44.8%+42.0%)→評価B 〔保護者〕79.4%(38.7%+40.7%)→評価C 〔教員〕78.5%(20.0%+58.5%)→評価C ・アンケートの1・2回の結果から、生徒のみならず、校内全体のあいさつをする雰囲気の醸成にまだ課題を残す結果となった。あいさつを大切にしようとする意識が高い教職員・生徒が多く在籍していると捉え、「あいさつ週間」や「あいさつ運動」など目に見える取組を生徒会とも連携して実施していく。	B	・あいさつに特化するのではなく、生徒と教職員との信頼関係、生徒同士の良好な人間関係が構築できる取組を、生徒会や各種委員会と協力し増やしていく。
	生徒課	・大安心の日(ボランティア清掃活動)や社会貢献活動などを通して、生徒自らが自主的に奉仕の精神を発揮できる機会を作るとともに、それらの機会自体を委員会や生徒会が主導となり企画運営する。	・大安心の日など、生徒課企画の社会貢献活動の参加状況、参加者の感想で評価する。	・5月19日に実施予定であった大安心の日(清掃ボランティア)に300名を超える生徒が希望した。雨天により9月22日に延期したが、こちらも雨天で延期となった。毎回希望者が多く、社会貢献活動への参加意識は高い。11月と12月に実施予定。	B	・11月の創立記念式典の開始前、2学期終業式後に大安心の日(清掃ボランティア)を実施。両日とも、各学年100名近くの生徒が参加した。(6年生を除く)生徒の感想として、「地域に対して少しでも役に立てる活動ができて良かった(後期美化委員長)。」「多くの生徒が参加してくれて感動した(生徒会長)。」等があった。生徒の参加意識も高く、自主的・自発的に清掃を行う機会が設けられたことが一番の成果となった。	A	・清掃活動や、学校主催行事のみが社会貢献活動とならないよう情報発信に努める。
	生徒課	・生徒会、HR委員会、交通委員会などの生徒会活動が主体となり、服装規定をはじめ、校則の見直しを行うとともに、ルール・マナーを守ることほもちろんのこと、状況に応じて判断・行動できる生徒を育成する。	・学校評価アンケートの「ルールやマナーに関する項目(〔生徒〕項目8、〔保護者〕項目5、〔教員〕項目6)の肯定的な結果から評価する。 〔生徒〕〔保護者〕〔教員〕共通で A 90%以上 B 80%以上 C Bに満たない	・アンケート結果より、 〔生徒〕94.8%(61%+33.8%)→評価A 〔教員〕98.4%(53.8%+44.6%)→評価A 〔保護者〕82.2%(38.5%+43.5%)→評価B ・生徒・教員の意識の高さがうかがえる。近隣住民や利用者からの苦情連絡が7件あるが、生徒に対するお礼の連絡もある。	B	・アンケート結果より、 〔生徒〕90.8%(57.0%+33.8%)→評価A 〔保護者〕82.4%(36.7%+45.7%)→評価B 〔教員〕97.0%(50.8%+46.2%)→評価A ・第2回のアンケート結果で、微減している項目ではあるが、取り組み自体大きな変更はない。生徒主導での取り組みとして、交通委員会によるあいさつ運動や後期HR委員会、学校生活マナー川柳を実施し、注意喚起やマナー向上を図ることができた。	B	・登下校に関して、10件ほどの苦情連絡があり、生徒自身がルール違反やマナーに反する行為をしている件もあった。 ・正門を左側通行にする、学校周辺の交通状況の整備を行政に依頼するなど、環境整備についても、関係機関と連携して、改善を要望していく。
	生徒課	・コミュニケーションを深め、互いの違いを認め合う、一人一人の個性を生かした集団づくりを行えるような学校行事の企画運営を、生徒を交えて実施する。	・白鷺祭後のアンケートの項目「他の生徒と協力して主体的に活動できたか」の肯定的な結果から評価する。 A 80%以上 B 60%以上 C Bに満たない	・アンケート結果より、98.2%が肯定的回答であった。また、同様のアンケートで「楽しめた」と回答している生徒が、文化の部98.4%、体育の部96.4%であり、生徒が充実感をもって行事に取り組んでいる様子が見えかけた。	A	・アンケート結果は中間評価時のもの。(98.2%が肯定的回答) ・白鷺祭が終わり、生徒会執行部、各種委員会が下半期の担当に代わったことで、アンケート結果上、微減となった点は仕方ない。白鷺祭だけでなく、リーダー研修会などの、異学年交流の機会や参加型の行事を工夫し、生徒の主体的な活動を支援できた。	A	・6学年の長期的な視野で学校行事を企画運営できる本校の強みを生かし、次年度の白鷺祭に向け、3学期から取り組んでいる。 ・リーダー研修会を活用し、生徒の自発的な取組から意見を学校行事に反映していくフレーム作りを進めている。 ・白鷺祭だけでなく、リーダー研修会などの、異学年交流の機会や参加型の行事を工夫し、生徒の主体的な活動をより一層支援していく。

令和5年度 岡山県立岡山大安寺中等教育学校 学校評価書（別紙）										最終評価	
学校経営重点目標	担当部署	具体的方策	評価指標・評価基準	自己評価(中間)		自己評価(最終)		次年度に向けて			
				達成状況	評価	達成状況	評価				
4 支援を必要とする生徒に適切な支援を行い、不登校や学校不適応をなくしていくよう取り組む。	教育相談室	(1) 生徒情報の共有と迅速な対応をする。	・職員会議や各学年団会議等で話題に上がった生徒、長欠調査等でリストに上がった生徒について、情報共有とともに支援体制の確立をする。	・教育相談室と学年等との情報共有と支援体制の状況によって評価を行う。 A 学年との情報共有ができ、支援体制も確立している。 B 学年との情報共有はできているが、支援体制については協議中である。 C Bに満たない。	・職員会議の報告については学年主任・担任と室長が話し、SCやSSWによる相談を勧めたケースも2件あった。また、学年の状況によって学活やホームルームを利用したピアサポートなどの取り組みを提案し、実施をしている。しかし、定期的な取り組みにはまだ協議が必要な状態である。	B	・中間評価とほぼ同じ状況が続いている。ピアサポートなど、よりよいクラス作りを目的とする取組については、hyper-OU・Assessの結果も分析しながら、学年主任や学年の教育相談室係と協同し取り組んでいる。	B	・室の係を中心に研修を進め、年間計画等へ組み込む必要がある。どのような取組や実施方法が本校に適切かを検討したい。		
		(2) SC、SSW、外部機関等との連携により適切な支援を行う。	・SC・SSWによる面談後、該当生徒の担任との情報共有について、直接の情報交換会の開催または記録の閲覧を確実に行った上で支援につなげる。	・「情報交換会の開催」や「記録の閲覧」の達成状況により評価する。 A 90%以上 B 80%以上 C Bに満たない	・カウンセリング後の情報共有の時間については、現在80%程度の出席がある。情報共有の場では、カウンセリングまでに行われた教員の支援の報告の後、カウンセリングの内容の報告があり、最後に担任が行う支援の手立てを考えると流れができています。	B	・SCやSSWと教員が直接情報交換をすることを重視し、情報共有の時間帯の調整や情報交換の効率化を図った結果、90%以上の出席があった。情報交換とともに、次の取組の検討ができたとともに、SCやSSWが次のカウンセリング内容の検討にも役立っている。	A	・今後も引続き、同様の形態を維持していくため、教職員全体の理解を得ることが必要である。 ・より効率的、効果的な情報交換会の実施や生徒支援ができるよう工夫をしたい。		
		(3) 校内美化等の教育環境を更に整備し充実を図る。	・各清掃場所の清掃用具等を整備するとともに、生徒一人ひとりが校内の美化を意識しながら、前向きに清掃に取り組む姿勢を養う。	・学校評価アンケートの「清掃」に関する項目（[生徒]項目10、[保護者]項目7、[教員]項目8）の肯定的な結果から評価する。 [生徒][保護者][教員]共通で A 90%以上 B 80%以上 C Bに満たない	・アンケート結果より、 [生徒]90.2%(47.5%+42.7%)→評価A [保護者]80.6%(37.1%+43.5%)→評価B [教員]87.7%(35.4%+52.3%)→評価B ・今後は、美化委員会による校内美化・清掃に関する呼びかけなど啓発活動や、定期的な清掃チェックの実施などにより校内美化の意識を高めたい。	B	・アンケート結果より、 [生徒]88%(46%+42%)→評価B [保護者]86%(41%+45%)→評価B [教員]83%(23%+60%)→評価B 10月から美化委員会による清掃チェックや呼びかけなど啓発活動や清掃ボランティア活動を行ったが、アンケート結果では意識の改善は見られなかった。保護者については肯定的な回答の割合がやや増加しており、取組の成果がいくらか見られた。	B	・校内美化や清掃に関する呼びかけなど美化委員会による啓発活動は、今後も継続していきたい。 ・今回のアンケートで肯定的な回答の割合が減少した生徒・教員について、取組を改善していくことが、今後の課題である。		
5 チーム大安寺の精神のもと、業務を、組織の視点及び個の視点から見直し、効率的な運営を学校全体で行う。（部活動を含む1か月当たりの時間外業務時間を、全教職員が80時間未満とする）	教務課	(1) 情報共有（日常の声かけ、ICT活用、打合せ）を丁寧に行い、教職員が助け合う風土をつくる。	・自動採点システム（百問線乱）の導入をICT管理室と連携して円滑に行い、採点業務の効率化を図る。	・学校評価アンケートの「自動採点」に関する項目（[教員]項目21）の肯定的な結果から評価する。 A 80%以上 B 60%以上 C Bに満たない	・9月に行ったアンケートでは、自動採点システムの導入により、採点業務が効率的になったという肯定的意見が90.8%であった。引続き、活用を促進し、採点業務の効率化につなげたい。	A	・自動採点システムについては、大半の教職員が利用しており、第2回の評価アンケートでは94%の教職員が肯定的な意見であった。	A	・自動採点システムを利用してできる答案の返却などについても研究し、ペーパーレスに一層貢献できるようにしたい。		
		ICT管理室	・情報共有がスムーズにできるようGoogle Workspaceを有効活用するとともに、便利な機能などを積極的にアナウンスしていく。	・学校評価アンケートの「ICT機器の利用」に関する項目（[教員]項目2）の肯定的な結果から評価する。 A 80%以上 B 60%以上 C Bに満たない	・アンケート結果より、90.7%(41.5%+49.2%)であった。 ・効率的な情報共有が図れるよう、上半期は職員掲示板の整備を行い、職員朝礼連絡・会議室予約・配布資料のペーパーレス化・生徒の欠席状況確認・生徒連絡をクラウド化するなど一元的に情報を管理できるよう整備を行った。	A	生徒向けの情報提供としての朝礼・終礼連絡をクラウド上で提供し、次年度へ向けてさらに提供できる情報を増やす準備ができた。（生徒会室へのネット環境のあるPC整備・時間割変更の確認など）	A	・教職員の働き方改革を進められるよう、他の課・室と協力し効率化を進める。 ・他の課・室と協力し、配付資料（保護者向け・生徒向けとも）のペーパーレス化を図る。（保護者向け資料のメール配信・アンケート調査のデジタル化など）		
			管理職 主幹教諭	・ミライムの記録を活用し、管理職面談（5月、10月）で、月ごとの時間外業務時間の推移や、前年度の同月との比較等を行い、本人と管理職で状況を分析し、業務負担の平準化や、年間の時間外勤務の総時間の削減を図る。 ※中間評価（9月）は8月までの平均、最終評価（12月）は12月までの平均を評価材料とする。	A 月80時間以上の人数が0名となる B 月80時間以上の人数が10名以内となる C Bに満たない	・8月までの平均で月80時間以上の教職員が8名。9月までの平均で月80時間以上の教職員は6名。時間外勤務について管理職面談からも教職員の意識の変容が見られた。個人としての業務の平準化は昨年度との比較で進んでいるが、定期考査と運動部活動の公式試合が重なる月では改善が進んでいないので、組織としての平準化をさらに進めていく。	B	・8月から12月までで、月80時間以上の教職員が前年度同月と比べて平均3.2人（最大月6人）減少しており、改善は進んでいる。 ・12月は前年度2人だったのが0人となった。一方月45時間以上の教職員は同比較で平均2.6人（最大月7人）増加している。これは80時間以上の教職員が45時間以上80時間未満になったためと考えられる。 ・4月から12月までの平均で月80時間以上が7人だが、8月から12月までは平均4.2人となり、年度内で改善が進んでいる。	B	・年度内の改善は、教職員個人毎の前年度と比較できる勤務時間のグラフ提示が一定の効果に繋がったので、継続して勤務時間を意識した働き方を推奨していく。 ・6月と10月に業務が集中することへの対応が来年度の課題である。	
	1年団 2年団	1年団 2年団	・白鷺祭において基礎期で協力し連携を図るために、放課後や休日の準備時間や日程をブロック（クラス）ごとに合わせ、2年生が1年生に文化祭における展示作成のノウハウや昨年度からの反省点などを伝える。 ・監督教員を学年を越えて、ブロック（クラス）単位で配置し、勤務時間の効率的な運営を図る。	・白鷺祭後の生徒アンケートによる満足度 A 95%以上 B 90%以上 C Bに満たない ・8～9月の教員の時間外在校等時間の平均（1・2年団） A 45時間以下 B 80時間未満 C 80時間以上	・白鷺祭に関する生徒アンケートでは、90%以上の生徒が満足していた。→評価B ・職員の時外在校等時間の平均は、34.5時間（8月：24時間、9月：45時間）であった。→評価A ・準備日程の把握なども難しく、学年を越えての監督は難しかったが、生徒によるノウハウの伝授はできた。 ・白鷺祭準備期間に2年生文化委員が1年生のクラスで展示について説明し、1年生は見通しを持って活動できた。	B	・生徒アンケート、教員の時間外在校等時間については、中間評価評価時のもの（90%以上の生徒が満足→評価B、教員の時間外在校等時間の平均は、34.5時間→評価A） ・白鷺祭以降、クラスや学年で生徒がより活発に交流する姿が見られた。 ・基礎期は、生徒同士や教員間で連携を図ることができた。 ・百人一首大会では、1・2年生文化委員が協力して礼の準備や管理、練習会や大会の運営を行った。	B	・1～2学期間の現在行われている行事や取組で協力できるものを見つけ、学期に1回程度、連携できるようにする。		
			3年団 4年団	・白鷺祭において、充実期で放課後や休日の準備時間や日程をブロック（クラス）ごとに設定する。 ・4年生から3年生に文化祭における制作についてのアドバイスを伝える機会をもち、各ブロックの連帯感の向上を目指す。 ・監督教員を学年を越えて、ブロック（クラス）単位で配置し、勤務時間の効率的な運営を図る。	・白鷺祭後の生徒アンケートによる満足度 A 95%以上 B 90%以上 C Bに満たない ・8～9月の教員の時間外在校等時間の平均（3・4年団） A 45時間以下 B 80時間未満 C 80時間以上	・白鷺祭に関する生徒アンケートでは、90%以上の生徒が満足していた。→評価B ・職員の時外在校等時間の平均は、45.5時間（8月：31時間、9月：60時間）であった。→評価B ・リハーサルなど、休日の準備日程が学年によって異なるため、学年を越えての監督は難しい面もある。	B	・生徒アンケート、教員の時間外在校等時間については、中間評価評価時のもの（90%以上の生徒が満足→評価B、教員の時間外在校等時間の平均は、45.5時間→評価B） ・白鷺祭後、生徒は各種講演会で新たな知見を得ることに刺激を受けたり、球技大会では仲間と協力して勝利を目指したり、熱心に取り組む姿が見られた。 ・部活動等で生徒同士、各種行事運営で教員同士の連携を取ることができた。	B	・白鷺祭などの学校行事や各種業務について、共有・連携できるものについて、今後も取組の改善を目指す。 ・時間外在校等時間は、担任業務・分掌業務、学校行事等の影響を受けるものであるが、必要な連携を取りながら、業務に当たり、改善をしていく。	
				5年団 6年団	・コロナ禍前の白鷺祭以上の生徒満足度となる文化祭・体育祭を目指すとともに、発展期の教員で連携・協力を強め、教員の時間外在校等時間をコロナ禍前の平均を下回ることを目指す。	・白鷺祭後の生徒アンケートによる満足度 A 95%以上 B 90%以上 C Bに満たない ・8～9月の教員の時間外在校等時間の平均（5・6年団） A 45時間以下 B 80時間未満 C 80時間以上	・白鷺祭に関する生徒アンケートでは、90%以上の生徒が満足していた。→評価B ・職員の時外在校等時間の平均は、43.5時間（8月：32時間、9月：55時間）であった。→評価A ・年度末まで時間外在校等時間の短縮を意識したい。	B	・生徒アンケート、教員の時間外在校等時間については、中間評価評価時のもの（90%以上の生徒が満足→評価B、教員の時間外在校等時間の平均は、43.5時間→評価A） ・白鷺祭を達成感を持って終えることができたため、その後、クラスや学年で生徒同士が集団としてより団結して取り組むことができるようになった。	B	・白鷺祭については、クラスや学年の絆を深めるよい機会と考えているため、来年度も引き続き評価Aを目指して指導にあたっていきたい。また、発展期を迎える生徒には学校全体のリーダーとしての責任も求められる場面が増えていくので、生徒にもその自覚を促していきたい。

学校経営重点目標	担当部署	具体的方策	評価指標・評価基準	自己評価(中間)		自己評価(最終)		次年度に向けて
				達成状況	評価	達成状況	評価	
(3) 各種会議を効率的・効果的に運営する。	教務課	・Google Workspaceの活用により、情報の共有をスムーズに行う。特に会議や様々な調整等についてはClassroomのストリーム、スプレッドシートを使い、空間的、時間的な制約を受けない有効な情報共有の手段を導入する。	・新たな情報交換の手段の創設について評価する。 A 情報交換手段が3つ以上創設できた B 情報交換手段が2つ以上創設できた C Bに満たない	・ICT管理室との連携により、現在は「生徒連絡」がオンラインで確認できるようになっている。またweb上の「大安寺ルーム」で生徒は欠席した場合でも、「生徒連絡」が見られるようになっている。教員への配付文書についてはオンライン上で管理することで、配付物の管理とともに、必要に応じて活用できるようになっている。(2つ創設できた。)	B	・教務課としてClassroomを立ち上げ、現在進行している業務について情報共有を行い、また、分掌として準備を進めることについて情報共有を行った。 ・年度当初に設定した配付文書管理については機能しており、紙ベースでの配付資料は減っている。(年間で合計3つ創設できた。)	A	・来年度は、チャット機能のあるアプリケーションなどを活用することで、学年会議なども最小限にできるように提案していきたい。
	生徒課	・Google Workspaceの活用により、情報の共有をスムーズに行う。教員間だけでなく生徒会執行部や専門委員会など様々な調整等についてはClassroomのストリーム、スプレッドシートを使い、空間的、時間的な制約を受けない有効な情報共有の手段を探る。	・新たな情報交換の手段の創設について評価する。 A 情報交換手段が3つ以上創設できた B 情報交換手段が2つ以上創設できた C Bに満たない	・生徒会執行部でclassroomを開設し、生徒間での情報共有を円滑にできる仕組みづくりを模索中である。白鷺祭は各ブロックでclassroomを開設し、6年生を中心にブロックでの情報共有に活用したが、運用についてはさらに利便性を高める必要がある。(2つ創設できた。)	B	下半期生徒会が発足し、classroomを活用した生徒会活動の充実を模索している。来年度から、全学年が端末を所有することもあり、様々な機会での情報共有が行えるよう研鑽を積んでいく。白鷺祭の生徒対象アンケートは、Googleフォームを使用して実施し、回答率も94.4%と高かった。集計結果も来年度の白鷺祭を検討する際に有効活用できた。(年間合計2つ創設できた。)	B	・時間や資源など様々な点で、効率良く情報交換ができるツールであるので、有効活用をさらに進めていく。 ・個人情報の保護や情報発信元の特定など、大きなトラブルを招く危険性があるので、活用時にはセキュリティ面に十分注意する。
	進路指導課	・課員全員が参加できない企画会議もあるので、Google Workspaceを活用して、会議の簡略化と情報の共有を図る。	・Google Workspaceの利用状況により評価をする。 A 開催回数の60%以上活用できた B 開催回数の50%以上活用できた C Bに満たない	・前期後期併せて31回の企画会議のうち、17回でGoogle Workspaceが活用できた。(活用率55%) 特に、前期課程の進路課企画会議では、授業の関係で全員が参加できないこともあり、Google Workspaceを活用することで情報の共有が図れた。	B	・前期後期併せて46回の企画会議のうち、27回でGoogle Workspaceが活用できた。(活用率61%)	A	・後期課程の会議では、あまりGoogle Workspaceが活用できていないので、さらなる活用を目指す。
	厚生課	・係分担が明確に決まっているので、必要なことは各担当者(2~3名)で情報共有や意見交換をしながら業務を行う。 ・課全体で検討が必要な場合は、会議を開催する。 ・来年度以降、担当者が変わっても業務内容が分かるようファイルやマニュアルを整備・保存する。	・ファイルやマニュアルの整備・保存状況について、 A ファイルやマニュアル等が整備され保存されている B ファイルが整備され保存されている C Bに満たない	・上半期の厚生課関連行事や各種業務の資料等については、各担当者がそれぞれの該当のフォルダに整理して保存できているが、マニュアル作りが今後の課題である。	B	・厚生課関連行事や各種業務の資料等については、各担当者がそれぞれの該当のフォルダに整理して保存できた。 ・各係の業務内容に関するマニュアルについては、担当者により、作成が進んでいる。	B	・次年度以降、担当者が変わっても各係の業務が円滑に遂行できるよう、ファイルの整理や保存、また、マニュアル等の作成は継続していきたい。
	教育相談室	・Google Workspaceの活用により、情報の共有をスムーズに行う。特に会議や相談等についてはGoogle Chatを活用する。	・毎月の情報交換会等について、Google Chatを中心としたGoogle Workspaceの利用状況により評価をする。 A 開催回数の60%以上活用できた B 開催回数の50%以上活用できた C Bに満たない	・各月の欠席調査により、各学年の長欠者について学年で把握し、係が集約している。集約した情報を室長がチェックし、各学年の担当者との連携を図る体制を取っている。参集での情報交換会は行っているが、Google Workspaceの活用についてはまだできていない。	C	・中間評価の状況とほぼ同様である。参集しての会議の回数を減らしたり、一度の会議の時間を短縮することを目的として、Google Workspaceの利用を検討したが、スキルの問題や、担当者が直接会って話をした方が良い内容であることも影響し、あまり浸透しなかった。	C	・資料の事前閲覧等、Google Workspace以外の方法により、効率的効果的な会議のあり方を引き続き、検討したい。
	グローバル教育推進室	・事前に検討事項を整理した資料を作成・配付して情報を共有しておき、会議の回数を減らす。	・担当行事の前に行う会議の回数が、 A 行事の回数未満である B 行事の回数に等しい C 行事の回数を超過している	・(会議の回数) = (行事の回数) という結果であった。行事前連絡は室長がとりまとめて連絡し、分担してあたることができているので、会議の回数は最小限に抑えられている。行事後に今年度を踏まえ来年度の計画について会議を行った。	B	・グローバル関係行事は各学年のグローバル教育担当がそれぞれ立案し、室長と相談しながら実施した。必要に応じて室長が文書で連絡し情報を共有したので、中間評価時から会議の回数は増えていない。(会議の回数) < (行事の回数) という結果である。	A	・議事や課題を事前に共有することで、行事の成功のために必要な会議を効率的に進める。
	総合研究開発室	・保存している昨年度までの資料やデータを活用して学習内容の充実を図る。 ・来年度へ向けて資料の整理を行う。 ・会議の短縮化を図り、Classroomを活用することで、情報の共有を促進し、会議の短縮を図る。	・効率的に会議を行うことを通して、総合的な学習・探究の時間を行う上で課題となっていることが改善されている。(校内で行う探究活動のルールの整備、学習のスケジュールの検討、身に付けさせたい力の整理など) A 課題が3つ以上改善された B 課題が2つ以上改善された C Bに満たない	・以前の大安寺版課題研究ルールが、一人一台端末を使用した授業にあっていないという問題について議論をし、現状に即したものに改善・改善した。新ルールは5月の職員会議で提案し、学校全体で共通理解をはかった。 ・前期課程における身に付けさせたい力、後期課程における活動のスケジュールを明確にし、下半期に向けて改善の目処が立った。これから学校全体で共通理解を図っていく。(2つ創設できた。)	B	・前期課程における身に付けさせたい力、後期課程における活動のスケジュールについて協議をし、これまでであったものをよりよい形にすることができた。 ・前期課程における評価基準について見直しをしている。 ・後期課程の課題研究の方法についてメンバーからの改善のアイデアが出たものの、実現に向けた具体的方策まではできていない。(年間合計3つ創設できた。)	A	・定期的に行っていた会議を廃止し、必要に応じて会議を開くようにする。 ・今年度達成できなかった課題について議論し、改善していく。
ICT管理室	・業務の効率化を図れるようなひな形となるエクセルシートや掲示板などの整備を図り、より一層のペーパーレス化を実現する。	・学校評価アンケートの「ICT機器の利用」に関する項目(〔教員〕項目2)で、業務の効率化や業務の生産性の向上につながったかを問う。 効率化につながった割合が、 A 80%以上 B 60%以上 C Bに満たない	・アンケート結果より、90.7%(41.5%+49.2%)であった。 ・会議室予約のクラウド化、職員会議資料のペーパーレス化などは定着してきており、ICT機器の日常的な使用が増えた。	A	・アンケート結果より、90.8%(35.4%+55.4%)であった。 ・職員会議資料だけでなく、各学年の会議資料や委員会活動の資料のクラウド化も進み、効率の良い運営ができた。	A	・校務の効率化が図れるよう、AIを活用していく。(AI音声・ChatGPTの活用など)	